

フランス語受動的再帰構文の意味構造

井口, 容子
広島大学大学院総合科学研究科准教授

<https://doi.org/10.15017/21011>

出版情報 : Stella. 30, pp.55-62, 2011-12-20. Soci?t? de Langue et Litt?rature Fran?aises de
l' Universit? du Kyushu

バージョン :

権利関係 :



フランス語受動的再帰構文の意味構造

井 口 容 子

1. はじめに

多様な機能をもつフランス語の再帰構文のうち、本稿でとりあげるのは、以下に見られるような「受動的用法」である。

- (1) a. Ce livre se lit facilement.
b. Cet appareil se manie difficilement. (Zribi-Hertz 1982)
- (2) a. Le vin blanc se boit frais.
b. Le caviar se mange avec de la vodka. (Ruwet 1972)

本稿では、筆者が井口 (2007a) 等で提案した「中間構文型」「未完了受動型」のふたつの下位クラス (それぞれ上記 (1a-b), (2a-b) に相当) の両方を視野に入れて、意味的側面からの分析を行う。特に注目する概念は「総称性」である。

2. 中間構文と総称性

中間構文の意味解釈を形式意味論的に記述した研究として、まず Condoravdi (1989) を見てみたい。Condoravdi は、中間構文において総称量化 (generic quantification) は «event» にたいして行われるものとする。そのうえで、[量化子 (quantifier)] [制限部 (restrictor)] [核作用域 (nuclear scope)] から成る3分構造を用いて、中間構文 (3a) の意味解釈を (3b) のように記述する。

- (3) a. This bread cuts smoothly.
b. $G [e: \text{bread}(x), \text{cut}(e), \text{Patient}(e, x)] [\text{smooth}(e)]$
(Condoravdi 1989 : 18)

(3b) における «G» は総称演算子 (generic operator) である。制限部には「イベント項 event argument」である «e» が入っている。(3b) は「このパンを切るというイベントは、一般にスムーズに進行する」と読み下すことができる。

一方 Fagan (1992) は、中間構文における総称量化はイベントにたいして行われるものではないと反論する。彼女は、(4) のような文はたとえ実際には一度もその靴入れが使われたことがなくても真であり得ることを根拠としてあげ、中間構文は複数の事象を一般化したものではないという。

(4) This shoe organizer mounts securely on a door or against a wall.

(Fagan 1992)

そして中間構文においては、総称量化はイベントではなく、潜在動作主にたいして行われると主張するのである。

(4) のような文を根拠に、中間構文は複数の事象を一般化したものではないという Fagan (1992) の主張は、かなり説得力をもつものと思われる。

3. フランス語の受動的再帰構文——「中間構文型」と「未完了受動型」——

それではフランス語の受動的再帰構文についてはどう考えるべきか。筆者は井口 (2007a) 等において、フランス語の受動的再帰構文に、「中間構文型」と「未完了受動型」のふたつの下位クラスを区別すべきであると主張した。中間構文型は、英語などに見られるいわゆる「中間構文」とほぼ同様の性質のものといえる¹⁾。以下の (5a-b) がその代表的な例である。

《中間構文型の受動的再帰構文》

(5) a. Ce livre se lit facilement. [= (1a)]

b. Cette étoffe se repasse rapidement. (Zribi-Hertz 1982)

一方、「未完了受動型」はこれらとはかなり性質の異なるものである。そして以下に示すように、さらにいくつかのタイプに下位区分することができる。

《未完了受動型の受動的再帰構文》

(i) 「規範」のモダリティを含意する属性叙述文

「白ワインは冷やして飲むものだ」と解釈される場合の (6) がこれにあたる。

(6) Le vin blanc se boit frais. [= (2a)]

(ii) 特にモダリティは含意せず、習慣的事象を述べるもの

「白ワインは一般に冷やして飲まれる」と解釈される場合の上記 (6) の文、および次の (7) のような文がその例である。

(7) Le français se parle aussi au Canada.

(iii) 事象叙述的性格が明らかなもの

(8) La question se traite actuellement à l'Assemblée²⁾.

(Zribi-Hertz 1982)

特定の時空間に位置付けられる (8) がその代表的な例である。

次節以降, 「中間構文型」「未完了受動型」の両方を視野において, その意味構造を考えてみたい。

4. 潜在動作主と量化

4.1. 動作主の非明示と「自発」

周知のように, フランス語の受動的再帰構文は, 「être+過去分詞」の形態をとる迂言的受動文とは異なり, 動作主を«par NP»として明示することができない。

(9) a. *Ce livre se lit facilement *par Paul*.

b. *Ce genre de livres s'achète *par les étudiants*.

この動作主を明示しないという特性は, 中相範疇 (middle voice) の機能拡張の観点からいうと, ひとつ前の段階である「自発的中相 spontaneous middle」(自発的再帰構文——従来「中立的代名動詞」と呼ばれてきたもの) から相続したのだと考えることができる。柴谷 (1997:24-25) は「自発」と同じ表現形式が, 動作主の介在なしには生じ得ない出来事を表すことができるようになった段階で, 受動的中相の用法が確立したものと見なす。たとえばボリビア方言のケチュア語の中相範疇は「受身」の段階まで発達させていると考えることができるが, その根拠となるのは (10) のような文の存在である。

(10) Ropas t'aqsa-ku-n mayu-pi.

clothes wash-REFL.3SG river-in

'The clothes are washed in the river.'

(柴谷 1997)

衣服がひとりでに川で洗濯されるといった状況は考えにくい (p. 25)。

ただ柴谷 (1997) は, こういった「ケチュア語の受身表現は動作主を言語的に表現できないと言う点において, スペイン語の se による受身表現よりは, 自発に近く, 受身としてまだ発達する余地が残っている」(p. 25) という。スペイン語の「se 受動」は限られたタイプのものであるが, 動作主の表現を許すのである。これに対してフランス語の受動的再帰構文は, 中相範疇の機能拡張の

段階からいえばケチュア語の例に近く、「受身」としてはまだ未成熟なものだといえる。

4.2. 「量化」による潜在動作主の解釈

受動的再帰構文における明示されない動作主は、「量化 quantification」によって解釈されることができると考えることができる。その場合、例文 (8), すなわち 3 節でみたタイプ (iii) のような、事象叙述的性格が明らかな「未完了受動型」の動作主は、「存在量化」を受けることになる。一方、「中間構文型」の受動的再帰構文の動作主は、総称演算子 (generic operator) による量化によって解釈されることができると考えることができる。Fagan (1992) はフランス語の中間構文 (本稿において「受動的再帰構文」と呼んでいるもの全般を指す) には、潜在動作主が総称的に解釈されるものと、存在的 (existentially) に解釈されるものがあると指摘し、後者の例のひとつとして、この Zribi-Hertz (1982) による例文 (8) をあげている (pp. 162-163)。

それでは 3 節のタイプ (i), (ii) に相当する、総称的意味を表す「未完了受動型」はどうだろうか。これらの文は「総称量化」による解釈を受けていることは確かであるが、問題は、その量化の領域が「(潜在) 動作主」なのか、それとも「出来事 (イベント)」なのか、という点である。次節においてはこれらのタイプに注目して分析を行う。

5. 動作主の総称化とイベントの総称化

以下のような未完了受動型の文は、「習慣的事象」を記述する文 (habitual sentences) であり、3 節の分類でいえば (ii) に含まれるものである。

(11) a. Le français se parle aussi au Canada. [= (7)]

b. Ce modèle se fabrique en Chine.

これらの文の動作主は総称的ではない。カナダの人がすべてフランス語を話すわけではないし、中国の人がすべて「この製品」を作るわけではない。ここにおいて「総称化」の対象となっているのは「動作主」ではなく、「出来事 (イベント)」なのである。

一方、次の (12) のような文はどうか。

(12) Le vin blanc se boit frais. [= (2a)]

3節の分類でいえば、「規範」の意味を表す場合にはタイプ(i)に分類され、単に習慣的事象を記述するものと解釈される場合にはタイプ(ii)となる。いずれの解釈を受ける場合にも、この文は複数のイベント(出来事)を一般化したものであると筆者は考える。モダリティを含意する「属性叙述文」の場合であっても、いわゆる「中間構文」の場合とは異なり、その「属性」は主語名詞句に内在する物理的特性あるいはそれに準ずる本質的属性ではない。筆者は井口(2010:75)において、「未完了受動型」の例文(12)と、2節でみた「中間構文型」の例文(4)(以下に(13)として再掲)を比較し、いずれも「属性叙述文」であるものの、以下のような相違が認められることを指摘した。

(13) This shoe organizer mounts securely on a door or against a wall.

[=(4)] (Fagan 1992)

(12)の場合、たしかに白ワインの持つ風味など何らかの属性が、「冷やして飲む」ことが好まれる原因として関与しているが、そのような属性を考慮してこの飲み方を決定するのは「人間」である。これに対して(13)の場合、靴入れ(shoe organizer)が壁などにしっかり固定できるかどうかは、靴入れそのものの物理的構造により自ずと決まってくる事柄であり、「人間」が介入する余地はない。この点において「中間構文型」は、*Le fer s'oxyde rapidement.*のような属性叙述的な「自発」に近いといえる。

「規範」のモダリティは、典型的な「中間構文」が表す「可能」とは異なり、人間の営みのなかで形成されるものである。人々が繰り返し行っていることが、「規範」の価値につながっていくのである。例文(13)の「靴入れ」の場合のような、「たとえ一度もそれが使用されたことがなくても真である」といえる属性ではない。以上の考察から、(12)のタイプの文においても、イベントを領域とした総称量化の解釈が行われているということが出来る。

2節でみたようにFagan(1992)は、いわゆる「中間構文」は複数のイベントを一般化したものではないと主張する。だが彼女は、フランス語の総称的性格の受動的再帰構文のうち、我々が「未完了受動型」と呼ぶものに相当するいくつかの例文や、英語・ドイツ語においても少数ではあるが見られる(14)-(15)のような典型的な中間構文とは性質を異にするものにかんしては³⁾、これらこそCondoravdi(1989)がいうような、イベントを総称量化したものであるという(p.159)。

- (14) Harlequins ... are those lighter-than-lightweight pastel paperbacks that *sell* in drugstores right between the magazines and the Stephen Kings.
- (15) Das ... *schreibt sich* ohne e.
 'That ... is written without an e.'
 (以上, Fagan 1992)⁴⁾

我々の立場も、基本的にはこのFagan (1992) の見解に近い。

6. 学術論文等に用いられる受動的再帰構文

次の文について考えてみよう。

- (16) Cette phrase *s'analyse* de la manière suivante.

この例文を日本語に訳すと、「この文は以下のように分析される」というところだろう。総称文であり、モダリティの観点からいえば「可能」が感じられる。この「可能」の意味はどこから出てくるのか。いわゆる「中間構文」ならば、「可能」のモダリティを含意するのはいかなる。しかしながら (16) は *de la manière suivante* という様態の副詞句を伴っており、その点において「中間構文」とは性質の異なるものである。

(16) はむしろ「未完了受動型」の再帰構文と見なすべきであろう。文脈によっては、「この文は一般に以下のように分析されている」という習慣の解釈も可能であることがそれを裏付けている。

(16) における「可能」の含意もまた、動作主の総称性によって説明することができるのではないだろうか。「誰がやっても」このような形で分析が行われるところから「可能」につながっていくのである。ただその場合、総称量化による潜在動作主の解釈の適用は、典型的な「中間構文」の場合だけでなく、「可能」の意味をもつものであれば、「未完了受動型」にも拡大されることになる。

Kageyama (2006) は、中間構文における潜在動作主の総称性は、構文のもつ属性叙述的性格、さらにいえば「個体レベル述語 *individual-level predicate*」としてのステイタスを説明するものではなく、むしろ「可能」のモダリティに結びついたものとする (pp. 95-96)。この見地からすれば、(16) のような未完了受動型の文に認められる「可能」のモダリティも納得できる。

(16) と同様のタイプの未完了受動型の再帰構文は、学術論文など、客観性を

要求されるテキストに多用される。総称的動作主を想定することにより、出来事の一般性を感じさせるレトリック効果を持ち、このことが客観性につながっていくのである⁵⁾。

7. 結語

以上、「総称性」に注目しながら、フランス語の受動的再帰構文を分析した。この構文の示す「可能」および「規範」のモダリティ、あるいは属性叙述文、習慣的事象を記述する文、さらには事象叙述の性格が明らかかな文など、広範な意味の領域に渡る用例間の関係などを説明するには、形式意味論的手法に基づいた意味構造の分析が不可欠だと思われる。今後さらに考察を重ねていきたい。

註

- 1) ただ、井口(2010)で指摘したように、英語等の中間構文とフランス語の中間構文型の受動的再帰構文を、まったく同じ性格のものに見なしてよいのか、という問題は残されている。
- 2) 春木仁孝氏の一連の研究(春木 1994, 1996 等)においては、(8)のようなイベント記述の性格の例は、受動的再帰構文ではなく、「自発」(中立的代名動詞)として分類される。だが筆者は、(8)のような潜在動作主が存在が明らかに感じられる文は、「自発」ではなく「受動(的再帰構文)」と見なす立場をとる。
- 3) Fagan(1992)はこれらの例を«non-core cases»と呼んでいる(p. 159)。
- 4) 例文(15)は、Fagan(1992)がJäntti(1978)から引用したものである。
- 5) 筆者は井口(2007b)において、このタイプの構文を含む未完了受動型の再帰構文を、「未完了性」、「自発性」のふたつの観点から分析した。

参考文献：

- Condoravdi, C. (1989): "The Middle: where semantics and morphology meet", *MIT Working Papers in Linguistics* 11, 16-30.
- Fagan, S. M. B. (1992): *The Syntax and Semantics of Middle Constructions*, Cambridge: Cambridge University Press.
- 春木仁孝(1994): 「中立的代名動詞と受動的代名動詞」『日仏語対照研究論集』, 日仏語対照研究会, 32-52.
- 春木仁孝(1996): 「現代フランス語の再帰構文再考——意味解釈の仕組みとモダリティ——」『言語文化研究』22, 大阪大学言語文化部, 171-194.

- 井口容子 (2007a) : 「代名動詞の意味・機能的ネットワーク——自発, 受動, 非人称——」, 『フランス語学研究』 41, 日本フランス語学会, 31-44.
- 井口容子 (2007b) : 「受動的代名動詞における未完了性と自発性」, 『ステラ』 26, 九州大学フランス語フランス文学研究会, 49-58.
- 井口容子 (2010) : 「フランス語の受動的代名動詞と中間構文」, 『ステラ』 29, 九州大学フランス語フランス文学研究会, 67-77.
- Jääntti, A. (1978) : *Zum Reflexiv und Passiv im heutigen Deutsch : Eine syntaktische Untersuchung mit semantischen Ansätzen*, Helsinki : Suomalainen Tiedeakatemia.
- Kageyama, T. (2006) : «Property Description as a Voice Phenomenon», T. Tsunoda & T. Kageyama (eds), *Voice and Grammatical Relations*, Amsterdam : John Benjamins, 85-114.
- Ruwet, N. (1972) : *Théorie syntaxique et syntaxe du français*, Paris, Éd. du Seuil.
- 柴谷方良 (1997) : 「言語の機能と構造と類型」, 『言語研究』 第 112 号, 日本言語学会.
- Zribi-Hertz, A. (1982) : «La construction “se-moyen” du français et son statut dans le triangle : moyen-passif-réfléchi», *Linguisticae Investigationes* 6-2, 344-401.